



# おすすめの一冊 北村邦夫『ピル』

**大**胆にも自著『ピル』（集英社新書）を「おすすめの一冊」として紹介することを決めました。あえて拙著としなかったのには理由があります。過去にも多数の著書を出版する機会を得ていますが、新書版を上梓するまでの苦労は並大抵のことではなく、「引用に際しては原著を明らかにせよ」「7行以上の引用はまかりならん」との執筆要項が編集部から提示され、完成までに実に2年の月日が流れていました。

「おわりに」で「ピルとの出会いが私の人生を大きく変えたといっても過言ではありません。」と書かせていただきましたが、今改めて振り返っても、この言葉には一点の誤りもありません。1988年4月に日本家族計画協会に就職。1987年から開始されていた低用量ピルの臨床試験真つただ中からピルと関わり、今もなお、筆者は日本人女性のQOL（生活の質）を向上させるピルの普及に向けて、「自分がや



『ピル』  
北村邦夫  
集英社新書

らずに誰がやるんだ！」と気負いながら取り組んでいます。

「自分の目の黒いうちに普及率を3割に！」のメッセージも折に触れて口にしてのことです。しかし、日本家族計画協会が2016年に実施した全国調査によれば、15〜49歳の生殖可能年齢女性のうち、現在ピルを服用している女性は78万人（3%）に過ぎません。

フランスやオランダの女性では既に4割を超えている現状と比較すると、何とも心もとない状況ではあります。

避妊薬・ピルの開発に向けて、日本の研究者たちが世界に先駆けて取り組んでいたことは、意外と知られていません。1955年のことです。米国がピルを承認したのが1960年ですから、同じ頃、日本でも承認への道筋が

着々と作られていました。しかし、今更申し上げるまでもなく、1999年6月、国連加盟国最後のピル承認国となった日本。同年9月2日の発売日にはピルを待望していた15人ほどの女性が筆者のクリニックの待合室を埋め尽くし、彼らを囲むように英国国営放送（BBC）をはじめとした国内外のメディアが殺到。掛け声と共に、筆者が手にしていたシヤンパンからコルクが勢いよく天井に飛んだ瞬間を今も鮮明に覚えています。

本書の帯には、「小泉純一郎も菅直人も承認を決断できなかった！」と大書されています。科学を超えたピルの話。ピルとは何か、ピル開発の歴史、わが国が世界最後の承認国となった理由、その過程で登場する政治家の面々、日本家族計画協会の役割、そして何よりも血気盛んな筆者の30代、40代、ピル承認を勝ち取るために奮闘していた姿を本書から追っていただければ幸いです。

## 北村邦夫

きたむら くにお  
一般社団法人  
日本家族計画協会会長・理事長  
群馬県生まれ。1978年自治医科大学医学部を第一期生として卒業。群馬県職員を経て、1988年から日本家族計画協会クリニック所長。2014年理事長、2018年3月から会長。